Bulletin of the School of Education,
Nagoya University (Psychology)
1998, Vol. 45, 45 − 53.

自己愛傾向に関する一研究

——性役割観との関連——

小　塩　真　司[1)]

問題と目的

従来，自己愛（ナルシシズム）という概念に関する研究は，Freudなど精神分析的観点からの理論的考察によるものが大部分であった。しかし近年，自己愛を客観的にとらえ，測定していこうという動きがみられるようになってきた。特に，Raskin & Hall（1979）は自己愛人格目録（Narcissistic Personality Inventory; NPI）を開発し，パーソナリティ変数の１つとしての自己愛傾向を測定する方法を提供した。日本においても，佐方（1986）や大石・福田・篠置（1987）がNPIの日本語版を作成したことから，これまでにNPIと様々な心理学的変数との関係が検討されてきている。

理論的あるいは臨床的な研究では，自己愛の男女による違いが報告されている。例えばフロイト（1914；懸田訳，1953）は，自己愛について言及する中で，女性の方が男性よりも自己愛的であると仮定している。しかし，DSM-Ⅳ（APA, 1994）には，自己愛人格障害と診断される者のうち50%から75%が男性であると記述されている。また Akhtar & Thomson（1982）は，臨床上の定義に沿った自己愛の病理は男性によくみられるとしており，社会との関係において，男性と女性では自己愛人格障害のあらわれ方が異なっていると述べている。さらに Haaken（1983）は，アメリカ文化において，self-aggrandizement や emotional detachment といった自己愛の特徴は，男性性役割に関連すると述べている。

質問紙を用いた研究をみると，海外の NPI を用いた先行研究では，男女でNPI得点に差がみられないと報告されているもの（Raskin & Hall, 1981）と，男性の方が女性よりも自己愛傾向が高いことが報告されているもの（例えば Watson, Grisham, Trotter, & Biderman, 1984; Carrol, 1987）がある。日本の NPI を用いた研究においても，男女でNPI得点に差がみられないと報告されているもの（福田・大石・篠置，1987; 大石，1987, 1989; 大石・福田・篠置，1987）と，男性の方が女性よりも得点が高いと報告されているもの（角田，1998; 三船・氏原，1991; 佐方，1986, 1987）がある。このような差がなぜ生じるのであろうか。あるいはこれらの差は誤差の範囲内なのであろうか。そこで，日本におけるNPIを用いた先行研究を概観してみる。なお，NPI総得点について男女差が検討されている先行研究の被調査者数とその所属，平均と標準偏差，尺度，男女差をまとめたものをTABLE 1 に示す。

まず，被調査者群の違いを検討する。先行研究では，被調査者として大学生のみを対象とするもの（三船ら，1991; 大石，1987, 1989; 大石ら，1987; 佐方，1987）と，大学生・短大生・専門学校生といった複数の集団に対して調査を行っているもの（角田，1998; 佐方，1986），高校生を対象としたもの（福田ら，1987）がある。大学生のみを対象とした研究を比較すると，男女で有意な得点差がみられなかったと報告されている研究（大石，1987, 1989; 大石ら，1987）と，男性の方が有意に高い得点を示したと報告されている研究（三船ら，1991; 佐方，1987）がある。大学生を対象とした複数の研究において，NPI総得点の男女差について異なる結果が見いだされているため，被調査者群の違いがこれらの異なる結果に影響を与えているとは考えにくい。

次に，尺度の項目内容や評定方法の違いを検討してみる。もともと Raskin & Hall（1979）によって作成された NPI は自己愛的特徴を表現した文章と，それに対応するそうではない文章の対からなる80項目で構成されており，二者択一の強制選択方式で回答する方式がとられている。そして Emmons（1984）は，80項目のうち54項目を選択して因子分析をすることにより，４つの因子を見いだしている。それ以降，NPI を用いた研究では，ここで選択された54項目が用いられている。日本においては，まず佐方（1986）が Raskinら（1979）の NPIを参考に新しいNPIを開発している（以下 SNPI と略記）。これは自己愛的特徴を表現した42項目で構成

1）名古屋大学大学院教育学研究科博士課程（後期課程）

TABLE 1　先行研究における被調査者，平均，標準偏差，尺度，男女差

著者	年	被調査者 性別	被調査者 所属	被調査者 人数	平均	SD	男女差検定	尺度 NPI	尺度 評定方法
佐方	1986	男	大学	64	63.51	14.93	男>女	SNPI[1]	5件法
		女	大学・短大・専門学校	169	55.06	14.99			
佐方	1987	男	大学	87	58.35	12.50	男>女	SNPI	5件法
		女	大学	101	54.16	12.57			
大石・福田・篠置	1987	男	大学	163	18.70	9.00	男=女	RNPI[2]	二者択一
		女	大学	219	16.80	7.30			
福田・大石・篠田	1987	男	高校1年	146	16.80	8.20	男=女	RNPI	二者択一
		女	高校1年	150	15.60	6.70			
大石	1987	男	大学	37	19.30	8.50	男=女	RNPI	二者択一
		女	大学	41	19.10	8.40			
大石	1989	男	大学	50	19.70	—	男=女	RNPI	二者択一
		女	大学	117	18.10	—			
三船・氏原	1991	男	大学	192	103.12	26.37	男>女	RNPI	5件法
		女	大学	179	97.99	22.70			
角田	1998	男	大学院・学部・医療専門学校	157	—	[3]	男>女	RNPI	7件法
		女	大学院・学部・医療専門学校	145	—				

1）佐方（1986）によって作成された尺度
2）Baskin & Hall（1979）に対応した尺度
3）2つの下位尺度別に平均・標準偏差が求められている。NPI-1：男性25.34，SD 9.73；女性21.50，SD 9.10；NPI-2：男性21.83（9.42），女性19.94（8.44）

されており，回答は「とてもよくあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの5件法で自己評定するようになっている。また，大石ら（1987）はRaskinらの尺度を翻訳し，日本語版のNPIを作成している。この尺度はEmmons（1984）が選択した54項目に対応した項目内容からなっており，Raskinらと同様，二者択一の強制選択方式で回答する方式をとっている。この大石ら（1987）によるNPIは三船ら（1991）において5件法に回答方式を変更して用いられている。他には宮下・上地（1985）が，Emmons（1984）の因子分析結果において.35以上の負荷を示した35項目を訳出し，7段階評定で用いており，角田（1998）ではこれらの項目が用いられている。大石ら（1987）と宮下ら（1985）の項目は，Raskinら（1979）の項目を日本語に訳出したものであり，表現に多少の違いはあるが，項目内容は共通している（以下，Raskinら，1979をもとにしたNPIをRNPIと略記）。TABLE 1より，SNPIを用いた先行研究（佐方，1986，1987）では，男性の方が女性よりも有意に高得点であることが報告されている。一方，RNPIを用いた先行研究では，男女で有意差がみられないものと男性の方が女性よりも有意に高得点のものがある。そこで，RNPIを用いた先行研究の評定方法を比較すると，二者択一の強制選択法を用いた研究（福田ら，1987；大石，1987，1989；大石ら，1987）では男女間に得点差がみられないと報告されており，5件法あるいは7件法を用いた研究（角田，1998；三船ら，1991）では男性の方が女性よりも得点が高いと報告されている。ただし，男女に有意な得点差がみられないと報告されているいずれの研究においても，男性の方が女性よりも得点が高い傾向にある（福田ら，1987　男性平均16.8，女性平均15.6；大石，1987　男性平均19.3，女性平均19.1；大石，1989　男性平均19.7，女性平均18.1；大石ら，1987　男性平均18.7，女性平均16.8）。

一般に，二者択一の強制選択法は，社会的望ましさの影響を除去する1つの手段として用いられる。従って，二者択一の強制選択法によるNPIで男女差が出にくく，5件法や7件法のNPIで男女差が出やすいという先行研究の結果には，社会的望ましさが影響を与えているのではないかとも考えられる。NPIの項目には男性にとって社会的に望ましい要素が含まれており，より社会的望ましさの要因に影響を受けやすい5件法や7件法によるNPIで，男女の得点差がみられる傾向にあるといえるのではないだろうか。そこで本研究では，男性・女性にとっての社会的に望ましい性質として，性役割に着目する。

性役割とは，「男性と女性を社会の中でのひとつの地位としてとらえ，それぞれの性に対して社会が期待する態度や行動様式の総称」（福富，1983）と定義される概念である。海外における先行研究では，NPIと性役割との関連について，先のHaaken（1983）の指摘と同

様の結果が見いだされている。例えばWatson, Taylor, & Morris (1987) やCarroll (1989) は，男性で男性性役割を持つ群が，女性や他の性役割（女性性役割群，両性性役割群，未分化群）を持つ群よりもNPI得点が有意に高いことを報告している。また性役割を考える場合，性役割にはいくつかの側面があり，それらは区別して考えるべきだという指摘（例えばLynn, 1959）を考慮に入れる必要がある。その中でも本研究では，“性役割観”に注目する。性役割観とは，性役割に関する自己の価値観（柏木，1973），性役割に対する個人の評価（東・小倉，1982）と定義される。社会における男女の価値基準の個人的な評価である性役割観と自己愛傾向との関連をみることにより，日本の社会において自己愛傾向を持つ者がどのような価値観を重視しているのかを検討すること，そして，自己愛傾向が男性にとっての社会的に望ましい要素と関連しているのか否かを検討することが可能であろう。

以上のような問題意識に基づき，NPIによって測定される自己愛傾向と性役割観との関連を検討することを本研究の目的とする。

方　法

1．調査対象

大学，短大，専門学校生の計520名（男性319名，女性201名）を対象に調査を行った。平均年齢は18.79歳（SD1.35歳）であった。調査時期は1998年4月で，調査は講義時間の一部を利用し，一斉に行われた。

2．尺度

(1) 自己愛人格目録短縮版（NPI-S）　自己愛傾向を測定する尺度として，小塩（1998b）によって作成された自己愛人格目録短縮版（NPI-S）を用いた。大石・福田・篠置（1987）はRaskin & Hall (1979) のNPIを日本語訳し，54項目からなる日本語版NPIを作成している。そして，小塩（1997，1998a，1998c）は，NPI日本語版から「優越感・有能感」「注目・賞賛欲求」「自己主張性」の3つの因子を抽出し，この3つの因子は，男女共通に見いだされる因子であり，複数の被験者群においても同様の因子分析結果が得られることを報告している。そして小塩（1998b）は，NPI54項目から，先行研究（小塩，1997，1998a，1998c）の因子分析においてそれぞれの因子に高負荷を示した28項目（「優越感・有能感」10項目，「注目・賞賛欲求」10項目，「自己主張性」8項目）を選択し，新たに「自己主張性」を意味すると考えられる2項目を追加し，さらに表現を平易なものに改めることにより，自己愛人格目録短縮版を作成した。NPI-Sは30項目からなり，回答は「とてもよくあてはまる」から「まったく当てはまらない」までの5件法で測定された。

(2) M-H-F Scale　性役割観を測定するために，伊藤（1978）によって作成されたM-H-F Scaleを用いた。M-H-F ScaleはMasculinity, Humanity, Femininityに各10項目の合計30項目からなる。伊藤（1978）では，項目の評定の際に強制選択法（重要なものから順に6項目ずつを選択させる）が用いられていたが，本研究では伊藤・秋津（1983）と同様に，30項目を独立に評定させた。回答は「あなたにとって次のような性質はどの程度重要だと思いますか」という教示に対して，「非常に重要である」から「全く重要でない」までの5件法で回答する形式で行われた。なお，M-H-F Scaleの項目内容はAPPENDIXに示されている。

結果と考察

1．NPI-Sの分析

NPI-S全30項目に対して因子分析（主因子解・プロマックス回転）を行い，3因子を抽出した。TABLE 2に，プロマックス回転後の因子パターンを示す。30項目による全分散のうち回転前の3因子によって説明できる割合は44.99%であった。各因子に高い負荷量を示した項目内容から，第1因子が「注目・賞賛欲求」因子，第2因子が「優越感・有能感」因子，第3因子が「自己主張性」因子と解釈された。各因子に負荷量の高い項目得点を合計し，「注目・賞賛欲求」得点（平均31.66，SD6.75，$\alpha=.86$），「優越感・有能感」得点（平均29.91，SD6.31，$\alpha=.82$），「自己主張性」得点（平均25.82，SD5.80，$\alpha=.87$）とした。さらに，全30項目の得点を合計し，NPI-S総得点（平均87.39，SD14.32，$\alpha=.89$）とした。ここで見いだされた自己愛傾向の3つの因子は，事前に想定した因子と同一のものであった。

男女差の検討を行ったところ，NPI-S総得点（男性平均89.91，SD15.33；女性平均85.81，SD13.42；$t(383.6)=3.11$，$p<.01$）と「優越感・有能感」得点（男性平均27.83，SD6.07；女性平均24.56，SD5.25；$t(379.8)=6.30$，$p<.001$）について，男性の方が女性よりも有意に高得点であった。先行研究では，小塩（1998a）において，「優越感・有能感」は男性の方が女性よりも有意に高い得点であることが報告されている。また三船ら（1991），佐方（1986，1987）で見いだされた因子のうち，本研究における「優越感・有能感」に相当する因子においても同様に，男性の方が女性よりも有意に高得点であることが報告されている。従って，先行研究と同様，本研究においても，自己愛傾向，特に「優

TABLE 2　NPI-Sの因子分析結果（プロマックス回転後の因子パターン）

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
【注目・賞賛欲求】			
23. 私は，みんなの人気者になりたいと思っている	.82	−.08	.05
8. 私は，どちらかといえば注目される人間になりたい	.76	.01	.10
26. 私は，人々の話題になるような人間になりたい	.70	.10	.02
5. 私は，みんなからほめられたいと思っている	.68	.02	−.17
2. 私には，みんなの注目を集めてみたいという気持ちがある	.66	.04	.10
14. 私は，多くの人から尊敬される人間になりたい	.65	.11	−.02
11. 周りの人が私のことを良く思ってくれないと，落ちつかない気分になる	.63	−.16	−.21
20. 機会があれば，私は人目につくことを進んでやってみたい	.58	−.04	.26
29. 人が私に注意を向けてくれないと，落ちつかない気分になる	.55	.15	−.10
17. 私は，人々を従わせられるような偉い人間になりたい	.45	.19	.11
【優越感・有能感】			
7. 私は，周りの人達より有能な人間であると思う	.03	.81	.00
4. 私は，周りの人達より，優れた才能を持っていると思う	.00	.80	.01
1. 私は，才能に恵まれた人間であると思う	−.05	.74	.06
13. 周りの人々は，私の才能を認めてくれる	−.07	.69	−.06
16. 私は，周りの人に影響を与えることができるような才能を持っている	.12	.68	.12
10. 私は，周りの人が学ぶだけの値打ちのある長所を持っている	.08	.65	.06
25. 私は，どんなことでも上手くこなせる人間だと思う	−.04	.62	.20
28. 周りの人達が自分のことを良い人間だといってくれるので，自分でもそうなんだと思う	.14	.54	−.12
19. 私が言えば，どんなことでもみんな信用してくれる	−.02	.53	−.11
22. 私に接する人はみんな，私という人間を気に入ってくれるようだ	.15	.35	−.01
【自己主張性】			
24. 私は，自己主張が強いほうだと思う	.02	−.15	.81
3. 私は，自分の意見をはっきり言う人間だと思う	−.01	−.04	.76
6. 私は，控えめな人間とは正反対の人間だと思う	.13	−.19	.74
30. 私は，個性の強い人間だと思う	.06	.07	.67
9. 私はどんな時でも，周りを気にせず自分の好きなように振る舞っている	−.22	.04	.61
12. 私は，自分で責任を持って決断するのが好きだ	−.06	.00	.59
15. 私は，どんなことにも挑戦していくほうだと思う	.11	.05	.56
27. 私は，自分独自のやり方を通すほうだ	−.08	.17	.49
18. これまで私は自分の思う通りに生きてきたし，今後もそうしたいと思う	−.17	.16	.41
21. いつも私は話しているうちに，話の中心になってしまう	.21	.12	.40

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅰ	—	.34	.22
Ⅱ		—	.40
Ⅲ			—

越感・有能感」は男性の方が女性よりも高得点である傾向が確認された。

2．M-H-F Scaleの分析

Masculinity，Humanity，Femininity のそれぞれについて，構成されている10項目の得点を合計することによって，Masculinity得点（以下M得点，平均39.66，SD5.25，$\alpha=.84$），Humanity 得点（以下H得点，平均42.07，SD5.10，$\alpha=.84$），Femininity得点（以下F得点平均33.11，SD6.46，$\alpha=.84$）を算出した。

M-H-F Scale の3つの得点間の被調査者全体，男女別の相関関係をTABLE 3に示す。男女込み，男女別それぞれにおいて，M得点，H得点，F得点間には正の有意な相関関係がみられた。伊藤（1978）は，M-H-F Scale を作成した際に，Masculinity，Humanity，Femininity の3者の関係を“三角形仮説”と称している。そして，男性と女性に共通する要素として Humanity があるとしている。TABLE 3に示された相関関係を見ると，M 得点と F 得点との間の相関係数よりもM得点とH得点，F得点とH得点との間の相関係数の方が大きな値を示している。また，H 得点の影響を統制したときのM得点とF得点との間の偏相関係数は

$\gamma_{MF \cdot H}$ =.05(n.s.)，F得点の影響を統制したときのM得点とH得点との間の偏相関係数は $\gamma_{MF \cdot H}$ =.58(p<.001)，M得点の影響を統制したときのH得点とF得点との間の偏相関係数は $\gamma_{MF \cdot H}$ =.43 (p<.001) であった。従って，H得点は男性性役割にも女性性役割にも関連する要素であることが本研究の結果からも見いだされたと言えよう。

ここで算出された3得点について男女差の検討を行ったところ，H得点とF得点について，女性の方が男性よりも得点が高い（それぞれt (382.3) =2.24, p<.05; t (367.6)=2.22, p<.01）という結果が得られた。しかし，M得点については有意な男女差はみられなかった。本研究と同じ方法で測定が行われている伊藤・秋津（1983）では，大学生において男性性は男性の方が女性よりも得点が高く，女性性は女性の方が男性よりも得点が高いことが報告されている。一方，遠藤・橋本（1998）は，Bem Sex-role Inventory を用いる中で，女性性を表すF得点は女性の方が男性よりも有意に高得点であったが，男性性を表すM得点と中性のN得点については有意な男女差がみられないことを報告している。そして，“青年層において男性性獲得の男女差が接近してきている可能性を示唆するものと思われる（遠藤・橋本，1998)”と考察している。本研究では，遠藤・橋本とは異なる尺度や評定法を用いており，後述するように性役割の概念の側面が異なっているが，同様の結果が得られた。またM-H-F Scaleの3得点を比較すると，男性においても女性においても，H得点が最も高く，M得点がこれに次ぎ，F得点が低いという傾向がみられた。これは伊藤（1978)，伊藤・秋津（1983）と同様の結果である。

M-H-F Scaleの3得点は，相互に有意な正の相関関係にあった。遠藤・橋本（1998）の研究では，Bem Sex-role Inventoryの男性性得点と女性性得点との相関係数が被調査者全体でr=.00 (n.s.)，男性でr=.25 (p<.05)，女性でr=−.11 (n.s.) となっており，本研究における結果と大きく異なっている。これは尺度の違いによるものなのか，性役割同一性と性役割観という概念上の違いによるものなのか，あるいは被調査者の違いによるものなのだろうか。本研究の結果のみでは，これらの問題に関する明確な回答を述べることはできない。この点に関しては問題を提起し，今後の課題として言及するにとどめておく。

TABLE 3　各M-H-F Scale得点間の相関関係と平均，標準偏差

	M得点	H得点	F得点	平均	S.D.
M得点	—	.66***	.41***	39.66	(5.25)
	—	.75***	.43***	40.01	(5.84)
	—	.61***	.40***	39.43	(4.83)
H得点		—	.57***	42.07	(5.10)
		—	.59***	41.42	(5.50)
		—	.54***	42.48	(4.80)
F得点			—	33.11	(6.46)
			—	32.28	(7.15)
			—	33.63	(5.93)

上段：全体（N=520)，中段：男性（N=201)，
下段：女性（N=319)
*p<.05　**p<.01　***p<.001

3．NPI-SとM-H-F Scaleの関係

NPI-SとM-H-F Scaleとの相関関係を男女込み，男女別に算出した（TABLE 4）。その結果，男性におけるM得点とNPI-S総得点，「注目・賞賛欲求」得点との間に比較的大きな正の有意な相関（それぞれr=.53, r=.52，ともにp<.001）がみられた。また，男性におけるH得点とNPI-S総得点，「注目・賞賛欲求」得点との間，F得点と「注目・賞賛欲求」得点との間に中程度の正の有意な相関がみられた（H得点　対　NPI-S総得点r=.44; H得点　対　「注目・賞賛欲求」得点　r=.47; F得点　対　「注目・賞賛欲求」得点　r=.42, すべてp<.001)。また，男女込みと男性におけるF得点と「自己主張性」得点との間，女性におけるH得点と「優越感・有能感」得点，「自己主張性」得点との間，F得点と「優越感・有能感」得点，「自己主張性」得点との間には有意な相関が見られなかった。

TABLE 4　NPI-SとM-H-F Scaleとの相関関係

	NPI-S総得点	注目・賞賛	優越・有能	自己主張
M得点	.39***	.37***	.25***	.27***
	.53***	.52***	.35***	.36***
	.27***	.23***	.15**	.21***
H得点	.26***	.32***	.14**	.11**
	.44***	.47***	.33***	.20**
	.14*	.21***	.05	.04
F得点	.23***	.32***	.15***	.05
	.35***	.42***	.29***	.09
	.16**	.25***	.09	.02

上段：全体（N=520)，中段：男性（N=201)，
下段：女性（N=319)
*p<.05　**p<.01　***p<.001

先に示したように，伊藤（1978）の三角形仮説に基づくM・H・F各得点は，相互に関連している。そこで，M・H・Fの各得点と各NPI-S得点との独自の関連を検討するために，H・F得点の影響を統制したときのM得点と各NPI-S得点，M・F得点の影響を統制したときのH得点と各NPI-S得点，M・H得点の影響を統制

TABLE 5　他の性役割観得点を統制後のM得点，H得点，F得点とNPI-Sの偏相関係数

	NPI-S総得点	注目・賞賛	優越・有能	自己主張
M得点	.31***	.22***	.20***	.26***
	.35***	.30***	.16*	.31***
	.22***	.12*	.14*	.23***
H得点	−.05	.02	−.06	−.07
	.00	.04	.05	−.08
	−.06	.02	−.07	−.09
F得点	.10	.17***	.07	−.03
	.14	.20**	.12	−.03
	.08	.16**	.06	−.03

上段：全体（N＝520），中段：男性（N＝201），
下段：女性（N＝319）
*p＜.05　**p＜.01　***p＜.001

したときのF得点と各NPI-S得点との偏相関係数を求めた（TABLE 5）。TABLE 5をみると，H・F得点の影響を統制したときのM得点と各NPI-S得点との間には有意な正の偏相関係数がみられ，M・H得点の影響を統制したときのF得点と「注目・賞賛欲求」得点との間にも有意な正の偏相関係数がみられた。しかし，H得点と各NPI-S得点との間，F得点とNPI-S総得点，「優越感・有能感」得点，「自己主張性」得点との間には有意な偏相関係数はみられなかった。

総合的考察

本研究の目的は，自己愛傾向と性役割観との関連を検討することであった。TABLE 4の結果より，NPI-S総得点と「注目・賞賛欲求」得点はM・H・Fの3得点全てと有意な正の相関関係にあった。またTABLE 5の結果より，男性においても女性においても，NPI-Sの各得点とM得点との間に有意な正の偏相関係数が見いだされた。また，「注目・賞賛欲求」とF得点との間にも有意な正の偏相関係数が見いだされた。従って，自己愛傾向全体は他の性役割観に比較して男性性役割観に関連しており，自己愛傾向のうち「注目・賞賛欲求」の側面は，男性性役割観にも女性性役割観にも関連していることになる。

Watsonら（1987）やCarroll（1989）は，男性で男性性役割を持つ群が，女性や他の性役割（女性性役割群，両性性役割群，未分化群）を持つ群よりもNPI得点が有意に高いことを報告している。本研究の結果は，自己愛傾向が男性性役割に関連することを示唆しているが，明確な関連性が見いだされたとは言いにくいものであった。本研究で用いたM-H-F Scaleは，性役割観を測定する尺度である。飯野（1984）は性役割を3つの側面に分類し，“性役割観”や“性役割選好sex-role preference”をCognitiveの側面，“性役割行動”や“性役割パーソナリティ”，”性役割採用sex-role adoption”をRealの側面，“性役割同一性sex-role identification”や“性役割志向sex-role orientation”をSelf-conceptの側面としている。先行研究（Watsonら，1987; Carroll, 1989）で用いられている性役割は“性役割志向sex-role orientation”であり，遠藤・橋本（1998）における性役割の概念は“性役割同一性”である。これらは“性役割に関して自分自身をいかにみているかという自己の位置づけや自己評価の側面（飯野，1984）”である，Self-conceptの側面に含まれる。一方，本研究で取り上げた性役割観は，“男性役割や女性役割はどうあるべきかという性役割規範や価値観，あるいはどのような行動をしたいかといった好みの問題（飯野，1984）”である，Cognitiveの側面に含まれる。今後は飯野（1984）の述べる，性役割のSelf-conceptの側面からも，自己愛傾向との関連を探っていく必要があるだろう。

また本研究の結果は，自己愛傾向を持つ者がどのような価値観を重視し，どのような特性を身につけるべきだと考えているのかを示しているといえよう。本研究で用いられたM-H-F Scaleは，“一般に男性（女性）にとって望ましい性質”を意味する項目を収集することによって作成されている。この“男性にとって望ましい性質”の内容は「指導力のある」「頼りがいのある」「自己主張のできる」など，いわば力の主張や行動力を意味する項目からなっている。一方，“女性にとって望ましい性質”の内容は「愛嬌のある」「優雅な」「従順な」など，外見のきれいさや人当たりの良さなどを意味する項目からなっている。従って，本研究の結果から，自己愛傾向のうち「優越感・有能感」や「自己主張性」が“男性にとって望ましい性質”とされる，力の主張や行動力を重視することに関連していることが示されたといえよう。また「注目・賞賛欲求」は，これら“男性にとって望ましい性質”と同時に，“女性にとって望ましい性質”とされる外見のきれいさや人当たりの良さも重視することに関連していることが示された。

小塩（1997）は，「注目・賞賛欲求」得点と社会的望ましさ得点との間に有意な負の相関関係がみられたことを報告している。この結果と「注目・賞賛欲求」が男性と女性にとって望ましい性質を重視することに関連するという本研究の結果は，相反する結果のように思われる。しかしこれは，望ましい性質を“重視する”ことと，“自分を望ましく見せようとする”ことの違いによるものとも考えられる。そのように考えると，自己愛傾向のうち「注目・賞賛欲求」を持つ者は，社会的に望ましい

性質を重視するにも関わらず，敢えて自分を好ましく見せ，他者に受け入れられようとしない傾向があるといえるかもしれない。

また，伊藤（1978）は．“男女とも女性役割を極端に低く評価し，社会的に低い価値しか持たぬと認知している。それに対してHumanityが非常に高く評価され，男性役割がそれに次ぐ重要な要素とみなされている”と報告している。先行研究（小塩，1997）と本研究の結果を考えあわせると，「注目・賞賛欲求」は，他の自己愛傾向の下位尺度にくらべ，社会的に望ましくない人格傾向を意味していることが示唆される。これは小此木（1989）の述べる，“自分の方から自分のナルシシズムを認めさせようとして，あれこれと動きまわる人は，日本社会では今でもやはり虚栄心が強すぎるとか，あの人は見栄のためにやったとか，ナルシシストとか言われると，それはよい意味にならなくなってしまうという文脈が，依然として続いている”という指摘に通じるものであろう。今後さらに，「注目・賞賛欲求」「優越感・有能感」「自己主張性」の自己愛傾向の3側面の特徴を探っていく必要があるだろう。

引　用　文　献

Akhter, S. & Thomson, J. A. 1982 Overview: Narcissistic personality disorder, *American Journal of Psychiatry*, **139**, 12-20.

American Psychiatric Association 1994 *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders Fourth Edition: DSM-*Ⅳ. Washington, DC: Author.

東清社・小倉千加子　1982　性差の発達心理学　大日本図書

Carroll, L. 1989 A comparative study of narcissism, gender, and sex-role orientation among bodybuilders, athletes, and psychology students. *Psychological Reports*, **64**, 999-1006.

Emmons, R.A. 1984 Factor analysis and construct validity of the narcissistic personality inventory. *Journal of Personality Assessment*, **48**, 291-300.

遠藤久美・橋本宰　1998　性役割同一性が青年期の自己実現に及ぼす影響について　教育心理学研究，**46**, 86-94.

福田美由紀・大石史博・篠置昭男　1987　自己愛的人格の基礎的研究(2)－自己愛的人格目録とＰＦスタディとの関係について－　日本教育心理学会第29回総会発表論文集，536-537.

福富護　1983　性の発達心理学　福村出版

フロイト，S.　懸田克躬（訳）　1953　ナルチシズム入門　フロイド選集　第5巻　性欲論　日本教文社　P.171-214.

Haaken, J. 1983 Sex differences and narcissistic disorders. *American Journal of Psychoanalysis*, **43**, 315-324.

飯野晴美　1984　「性役割」という概念の多面性について　心理学評論，**27**, 158-171.

伊藤裕子　1978　性役割の評価に関する研究　教育心理学研究，**26**, 1-11.

伊藤裕子・秋津慶子　1983　青年期における性役割観および性役割期待の認知　教育心理学研究，**31**, 146-151.

角田豊　1998　共感性と自己愛傾向の関連　共感経験尺度改訂版（EESR）と自己愛人格目録（NPI）を用いて　心理臨床学研究，**16**, 129-137.

柏木恵子　1973　現代青年の性役割の習得　依田新・大西誠一郎・斎藤耕二・津留宏・西平直喜・藤原喜悦・宮川知彰（編）　現代青年心理学講座5　現代青年の性意識　第3章　金子書房　Pp. 99-139.

Lynn, D.B. 1959 A note on sex differences in the development of masculine and feminine identification. *Psychological Review*, **66**, 126-135.

三船直子・氏原寛　1991　青年期の自己愛人格について－実証的研究を中心にして－　大阪市立大学生活科学部紀要，**39**, 199-213.

宮下一博・上地雄一郎　1985　青年における自己愛（自己愛）的傾向に関する実証的研究(1)　総合保健科学，**1**, 51-61.

小此木啓吾　1989　自己愛人間再考　青年心理，73, 149-157.

大石史博　1987　自己愛的人格に関する研究(2)－ＹＧ性格検査との関係について－　日本心理学会第51回大会発表論文集，535.

大石史博　1989　自己愛的人格に関する研究(4)－共感性との関係について－　日本心理学会第53回大会発表論文集，155.

大石史博・福田美由紀・篠置昭男　1987　自己愛的人格の基礎的研究（1）　－自己愛的人格目録の信頼性と妥当性について－　日本教育心理学会第29回総会発表論文集，534-535.

小塩真司　1997　自己愛傾向に関する基礎的研究　－自尊感情，社会的望ましさとの関連－　名古屋大学教

育学部紀要（教育心理学科），**44**，155-163.

小塩真司　1998a　青年の自己愛傾向と自尊感情，友人関係のあり方との関連　教育心理学研究，**46**，280-290.

小塩真司　1998b　青年の自己愛傾向と友人関係　－高校生を対象として－　日本教育心理学会第40回総会発表論文集，148.

小塩真司　1998c　自己愛傾向の二側面に関する検討　－3つの自己愛尺度を用いて－　教育心理学論集（名古屋大学大学院教育心理学専攻編集；1997年度），**26**，19-32.

Raskin, R. & Hall, C. S 1979 A Narcissistic Personality Inventory. *Psychological Reports,* **45**, 590.

Raskin, R. & Hall, C.S 1981 The narcissistic personality inventory: Alternate form reliability and further evidence of construct validity. *Journal of Personality Assessment,* **45**, 159-162.

佐方哲彦　1986　自己愛人格の心理測定－自己愛人格目録(NPI)の開発－　和歌山県立医科大学進学課程紀要，**16**，63-76.

佐方哲彦　1987　自己愛人格と共感性の関連　和歌山県立医科大学進学課程紀要，**17**，67-75.

Watson, P.J., Grisham, S.D., Trotter, M.V., & Biderman, M.D. 1984 Narcissism and empathy: validity evidence for the narcissistic personality inventory. *Journal of Personality Assessment,* **48**, 301-305.

Watson, P.J., Taylor, D., & Morris, R.J. 1987 Narcissism, sex roles and self-functioning. *Sex Roles,* **16**, 335-350.

謝辞

本論文作成にあたり御指導いただいた，名古屋大学教育学部　小嶋秀夫教授に深く感謝申し上げます。また，貴重な時間を割いて調査に応じて下さった被調査者の方々に重ねて感謝の意を表します。

（1998年9月16日　受稿）

APPENDIX 本研究で用いられたM-H-F Scaleの項目内容

Masculinity	Humanity	Feminity
1. 冒険心に富んだ	11. 忍耐強い	21. かわいい
2. たくましい	12. 心の広い	22. 優雅な
3. 大胆な	13. 頭のよい	23. 色気のある
4. 指導力のある	14. 明るい	24. 献身的な
5. 信念を持った	15. 暖かい	25. あいきょうのある
6. 頼りがいのある	16. 誠実な	26. 言葉づかいのていねいな
7. 行動力のある	17. 健康な	27. 繊細な
8. 自己主張のできる	18. 率直な	28. 従順な
9. 意志の強い	19. 自分の生き方を持った	29. 静かな
10. 決断力のある	20. 視野の広い	30. おしゃれな

ABSTRACT

A Study of Narcissism and Sex Roles

Atsushi OSHIO

The main purpose of this study was to examine the relation between narcissism and sex roles. The Narcissistic Personality Inventory Short Version (NPI-S) and the M-H-F Scale devised for the evaluation of sex roles consisting of three elements: Masculinity, Humanity, Femininity (Ito, 1978) were administered to 520 participants (319 males and 201 females, mean age 18.79). A factor analysis of the NPI-S revealed three significant factors which were labeled "need for attention and praise," "sense of superiority and competence," and "self-assertion." The results were as follows: The NPI-S showed a positive relationship with Masculinity. The "sense of superiority and competence" factor and "self-assertion" factor also showed a positive relationship with Masculinity. The "need for attention and praise" factor showed positive relationships with Masculinity and Femininity. Implications of these findings were discussed.

Key words: narcissistic personality, gender, sex-role